

長い長い行程ならぬ沢程であった。

クモ沢出合より、ゴルジュを越して一五分。やっとのことで本日目的地、ワサビ沢出合である。

さっそく遡行開始。二びの滝がかり、二俣となる。左俣を遡行して右俣を下降することにして、左俣に入る。

滝は二びクラスのものポツリポツリであるが、この沢の特徴は、赤茶色から灰色の花崗岩のナメである。このナメは源頭まで続いた。

大きな石が沢をドンと塞いでいる場所を通り、ワサビ沢に入ってから約三〇分で源頭となる。右俣めざしてヤブこぎ開始。

もう一つ特記すべきことがある。

このワサビ沢一帯は、ブナの原生林である。林道より遠く、まだ伐採の手が届いていないのであろう。胸高

直径は、どれもこれも一びを楽にこす。森林生態学上は「ブナの極生相」を形成している。そのせいか、下層植生は少なく、ヤブこぎも楽で、なんなく右俣源頭に出ることができた。

滑谷沢本流

L

一九八一年八月三〇日

天気晴。六時四五分、旧一三号国道にかかる橋の所から下降開始。あまりの平凡さに退屈した頃、三〇びほどの長さのナメが三本続く。沢床のほとんどが滑状になっていて、滑谷沢という名前も、なるほどという感じである。

七時二〇分、ようやく滝を見る。二・五び。この辺からナメと小滝が交互に現れる。

(記・)

「タイム」ワサビ沢出合(一・二・五五)

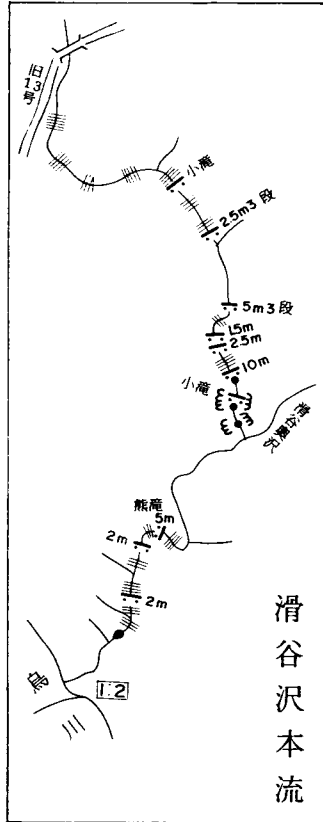
↓二俣(一・二・〇〇)↓遡行終了

(二・三・三〇)

八時一五分、この沢最大の滝であるF4一〇びに着く。幅・水量とも充分で、高さの割に迫力を感じさせた。右の草付きを捲いて小休止。ここで滑谷奥沢(仮称)に入るパーティと別れる。

このあと沢の様相は次第に平凡になってきた。そして私のペースも落ちた。前日の遡行で爪を剥がし、時々全身に激痛が走る。

滑谷沢本流



一〇時頃、F3五段に着く。釣人の話では、熊滝と呼ばれているそうである。私自身は痛みで意識モウロウ。自己陶酔の世界に入っている。

そこにいるのはガストン・レビョフアの《星にのぼされたザイル》である。とにかく死物狂い。片足を引きずって歩くそんな私を、釣人たちはどう思っただろうか。

一〇時三〇分、気がつくくと烏川本流である。そしてその先に更に恐ろ

しい現実が待っていた。林道まで二時間。更に車ポ地までもう二時間。もう前に行く二人の姿がうらめしかった。

(記)

「タイム」 下降開始(六:四〇) ↓熊

滝(一〇:〇〇) ↓烏川本流(一〇

:三〇) ↓林道(一二:三〇)

花の美しい樹木③

タニウツギ

(スイカズラ科)

落葉低木で三〜四mになる。五〜七月にピンクまたは紅色の、長さ三センチ程度のラッパ型の花をたくさんつけるのが特徴である。桜の花が散った後のピンクの花は、このタニウツギである。林道のわきの日当りの良い所などでよく見かける。

このタニウツギをウツギと呼ぶ場合もあるが、本当のウツギとは全く別種。ウツギはユキノシタ科に属し、花の色も白く、枝一面に花をつけ、ウノハナとも呼ばれていることを知ってもらえば幸いである。(大西)